

氏名	佐藤 悠
ヨミガナ	サトウ ユウ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第522号
学位授与年月日	平成29年3月27日
学位論文等題目	〈論文〉 「物語構造化」する「日本型アートプロジェクト」に対する態度としての表現の研究 一協話と笑いについて一 〈作品〉 はなし・かける 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	日比野 克彦
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	古川 聖
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	八谷 和彦
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	

（論文内容の要旨）

筆者は、アートプロジェクト型の表現を行ってゆくにあたり、その内容の共有、伝達の困難さを感じるようになった。非物質的な要素を主軸に持つこのような活動は、動画や写真などに記録したものを第3者に提示しても、現場で生まれた価値観や、人々に起こった変化などを伝えることに大きな困難が伴う。そんな状況の中、筆者は「語り」によって、プロジェクトが伝えられている事に気づく。アーティストや、企画者の語りによって、まだ見えないプロジェクトが想起され、人々を巻き込んでゆき、また、目に見えるものは何も残らなかったプロジェクトも、参加者によって語り継がれることで、記録、伝播されてゆく。アートプロジェクトは、一つの物語の共作ではないか、そう思い至ったことが、今回の研究のきっかけになった。

アートプロジェクトが物語の構造に接近してゆく状態を本論では「物語構造化」と呼び、研究を行う中で、過度な「物語構造化」によって引き起こされる弊害が、現在アートプロジェクトに対して指摘されている課題となっているのではないかと考えるようになった。本論は、アートプロジェクトと物語の関係を考察しながら、急速な「物語構造化」が引き起こす状況の研究と、その状況に対する表現を模索するものである。

1章では、まず本論が扱う「日本型アートプロジェクト」がどのような物であるか、先行研究を参考にしながら、様々な角度から考察した。1節では1950年代から、現在までのアートプロジェクトの成立の歴史を追い、「場」、「時間」、「関係性」への興味から始まった表現が、「社会的事象との有効な関わり」を求められるようになっていった変遷を総括する。2節では、様々な研究者などが表すアートプロジェクトの定義を比較検討し、この分野が扱う「芸術」と「社会」のバランスがどのように推移しているのかを考察した。3節、4節では、プロジェクトを実践している研究者の論文などから、アートプロジェクトの構造

や、活動を支える精神について触れ、5節では、「形骸化」「陳腐化」「マイクロユートピア化」など、現在アートプロジェクトが指摘されている課題についてまとめた。

2章では、アートプロジェクトと物語の関係について、野家啓一や、大塚英志などの物語論を参照して述べた。1節では、非物質的な要素を扱うアートプロジェクトと、経験不可能な出来事をコンテクストに落とし込むことで共有可能にする「物語行為」の関係について、2節ではアートプロジェクトと民話の物語構造の関係について、成年式的な構造が見出せることについて論じた。3節では2節で参照した「物語構造」をもとに、いくつかのアートプロジェクトの記述を検証し、共通の構造が見出せることを指摘した。さらに4節、5節では、人々が物語を求める要因である現在の時代背景や、物語的因果律、物語の消費行動などの、物語と人々の関係性に触れ、アートプロジェクトの過度な「物語構造化」によって生じる課題とその対抗策について論じた。

3章では「物語構造化」によって生じる状況に対する、表現を探った。過度な「物語構造化」への対応として、物語を作りあい、その構造に意識的になり、さらに相対化してゆく表現を提示し、1節ではその手掛かりとして、「解釈学的変容性」を有する口承による表現に着目した。その中でも、場の誰もが相互的に語り合う協話によって物語を共同制作する「シンローグ」という手法に注目し、2節、3節、4節では類似例を挙げながら、その話法を考察した。5節では、自身の活動「いちまいばなし」に触れながら、「物語構造」を相対化する「シンローグ」についてさらに詳しく論じ、カタリとハナシを行き来しながら、協話を行うことで、「物語構造」の相対化を行う方法を示した。

4章では、3章で扱ったシンローグ「いちまいばなし」の現場で、価値を作る基盤となる「笑い」に注目し、笑いがもたらす作用を分析しながら、この行為が「物語構造」の相対化において、大きな価値基準となる物であり、ひいては美学不在と言われているアートプロジェクトの新たな美学となる可能性を論じた。1節では「シンローグ」での笑いの役割について述べ、2節では笑いの生理学的側面や、分類などの研究を行いながら、「シンローグ」で発生する笑いがどのような物なのかについて分析した。その中で、あるべき世界と、そうではない世界の間で、解離的な接続が起こることで笑いがおきるという「二世界方式」根底にあることが分かり、それが「物語構造」を相対化してゆく「シンローグ」の笑いにつながってゆくことを述べた。

終章では、これまでの論を総括し、アートプロジェクトと物語の関係を意識することで、現在指摘されている課題や、閉塞性を転換する可能性を、「シンローグ」と「笑い」の中に見出せることについて述べ、論を閉じる。

(論文審査結果の要旨)

本論文において、佐藤は70年代以降、あたらしいアートのかたち、方向性をめざすものとして様々なスタイル、地域、アートシーンにおいて欧米や日本国内で行われてきたアートプロジェクトから、主に日本で行われてきた、そして行われている日本型アートプロジェクトを区分し、そのプロジェクトの類型がもつ問題点を明確化し、将来への展望を示し、論文のなかで興味深い視点から重要な提案を行った。論文はアートプロジェクトの歴史を丹念に調査することから始まり、そこで行われた言説に佐藤の考察が加えられ、まとめられ、そのなかで、彼が自らも実践する、日本型アートプロジェクトが位置付けられている。アートシーン全体がポストモダン化される中、「大きな物語」の後に来る、いわば個別の「物語」と言うキーワードのもとに日本型アートプロジェクトは「物語構造化」され、その骨格を支えるものとされ、中心的な役割を果たしていく。しかしそれはマンネリ化や一面性、偶然性などの重大な問題点をもつと論じ、それを自らの実践を通して到達した、アートプロジェクトの作者と参加者、またはアートプロジェクトの参加者間におこる、協和的なコミュニケーションの形式、シンローグの形式に注目し調整するための提案がなされた。まず、現行に行われているコミュニケーションの形式を分類、分別した後、このシンローグの特徴を明確化し、このシンローグを通しておこる「笑い」という、いわばメタ認知的、相対化の視点を設定することで、これらの危機を乗り越える可能性が論じられた。佐藤の論文の特徴はその論考が自らの活動に密接にむすびつき、そのプロジェクトの実践と密接な関係にあり、実践に裏打ちされていることに

ある。そのことにより論考には豊富な事例と、その分析が加えられ、説得力の強いものになっている。論文の全体の論理構成やバランスは明晰に整理され、十分な調査を踏まえ、考えぬかれた秀逸なものである。以上の理由から、本論文は学位授与に値すると認め、合格とする。

(作品審査結果の要旨)

佐藤悠は、すでに多くの芸術祭などで作品を発表しており、観客を巻き込んだ形で制作を行うのが彼の作品の特徴である。今回の博士展では今までに実施した作品に共通するテーマ「ひととはなす」ということを基軸に展示を構成している。

会場内には、一見して目立つ要素として「ゴロゴロ勘平」「いちまいばなし」「KENPOKU SONGS」などの各作品でつくられた、非常に目立つコスチューム類（それはハッピーや派手な柄のシャツなどだが、これはプロジェクトの主催者であることを明示しつつ、ある種道化師のような親しみやすさを前面に打ち出したものである）および、観客と物語をつくる「いちまいばなし」の記録としての音声再生用のカセットテープ、提灯などの小道具で構成されるが、今回の博士展での彼の主眼はそのような「目立つ小道具」を作品記録として見せる、というよりは「展示をきっかけに、会話を成立させる」ことそのものにある。

それが顕著なのは、展示の中央にある、インフォメーションカウンターのような外観をした受付ブースであり、その中に作家本人が常時滞在し「頃合いをみて観客に話しかける」という今回の展示のルールである。これは単に「作者による作品解説」に見えてしまう可能性もあるが、実際に佐藤が目論んでいるのは「観客に正しく作品を理解してもらおう」という事では全くなく、観客がどこに注目するかに着目し、観客との会話の中でそれを転がして作家自身も気づかなかったような場所に着地させたい、という事である。これは、初期の代表作である「いちまいばなし」にも顕著であるが、作家が作品をコントロールしすぎず、観客の自発性に基づき話が予想外の方向に向かう、その事自体を協創する構造を作る、という佐藤の姿勢とも一貫している。彼の各アートプロジェクト作品のなりたち、つまりプロジェクトが周期的に繰り返し行われることや、関わった観客による偶発的な出来事により作品がアップデートされるというフレームを用いて、作家と観客の対話を通じて生まれる物語こそが作品の本質に変わっていくという作家の活動が今回の展示として結実されたものと判断する。

以上の理由から審査委員全員の承認の下に本作品を博士号に値すると認める。

(総合審査結果の要旨)

佐藤悠にとっての作品とはコミュニケーションを体現するということである。一般的には作者が作品を制作し、それを観客が鑑賞し作品と観客の間にコミュニケーションが発生するというのが常道である。もしくは、コミュニケーションをテーマとしたプロジェクトを作品として企画運営するという形態も近年多く見られる。しかし佐藤悠の場合はそのどちらでもなく、作者本人が媒体となり鑑賞者との間にコミュニケーションを創造していくのである。これは芸能の領域に近いところはあるが、芸能の場合はコミュニケーションが目的ではなく、人間の喜怒哀楽という感情的な揺らぎを鑑賞者に与えるというのが最終目的とするものが主である。

佐藤悠の博士修了作品は彼がこれまでに行ってきた「ゴロゴロ勘平」「いちまいばなし」「KENPOKU SONGS」などの活動のドキュメントを掲示した会場内に佐藤悠が常勤し、それらの作品を観客が見ている様子に注視しながら、自己の世界に入り込んでいる鑑賞者に対してコミュニケーションを計っていく。その表現手段は、互いの会話が主な手段となる、佐藤の話し言葉を操る能力が重要になる。美術館という空間に於いて、会話というものは積極的には歓迎されていないが、慣習的な美術館への試みも、修了作品展ならではのものとして、今後の彼の活動に、また美術館の役割への問いかけとなった。佐藤悠の表現の手段、方法、目的は、東京藝術大学美術研究科のこれまでの形態に囚われることなく、先端芸術表現専攻らしい複合的なものになっている。多様性が受け入れられる社会を目指す現代において、藝術というものがこれからの社会に於いて、新たな役割を担っていくことが期待されている。そのような状況の中で、既成の藝術的価

値観に縛られることなく純粹に人と人のコミュニケーションを作家本人の身体、言語で表現していく姿勢は今後も大いに期待される。これらのことを総合的に踏まえて、審査委員会で審査の上、合格であると判断いたしました。